令和4年10月号No.174

伊王島を歩く

本会幹事　陸門良輔

長崎市伊王島町は、南北に連なる沖之島と伊王島の二つの島から成るが、合わせて伊王島町(以下、「伊王島」と記述)と呼ばれている。

16世紀後半長崎に来航したポルトガル人は、伊王島を「カバロス島」と呼んだが、これはポルトガル語で「馬の島」とか「群馬(ば)の島」という意味だそうだが、どうしてこう呼ばれたかはわからない。

伊王島は、かつて祝う島と呼ばれたという。西川如見は、『長崎夜話草』(『長崎叢書(一)』長崎市　大正15年)の「長崎由来並鎮懐石之事」の項で、「(略)いわう島は祝ふ島いつの世に誰人の何をか祝(ことぶ)きてささ(酒)汲みかはしけん(略)」と記述しているので、誰にちなむ伝説かは認識していなかったようである。

しかし、これは神功皇后にちなむ伝説で、皇后が伊王島に来られたので、おめでたい、お祝いしようということで命名されたといわれている。

このほかにも伊王島の地名については、かつて魚のことを「いを」と呼んでいたので、江戸時代、鰯漁が盛んだった伊王島を魚の宝庫、魚の王様ということで、伊王島と呼ぶようになったともいわれている。

俊寛僧都の墓碑とされる石碑

伊王島には平家の討伐を企てたとして、俊寛僧都(以下、「俊寛」と記述)や丹波少将藤原成経、平判官康頼の3人が流された島としていろいろと伝説があり、元文4年(1739)に開創された円通寺(曹洞宗)には俊寛にゆかりという品も伝えられている。

伊王島の俊寛にまつわる伝説をまとめたものが、長崎の勝木枕山が著した『硫黄島名蹟』である。

枕山は、俊寛の墓を伊王島町1丁目の地と断定、宝暦5年(1755)墓碑を建立した。しかし、天保14年(1843)同墓碑が台風で倒壊したため、弘化2年(1845)再建されたのが、現在の墓碑(市指定有形文化財)という。

このように伊王島には俊寛にまつわる伝説があるが、俊寛らが流された硫黄島は、一般には鬼界ケ島(鹿児島県奄美群島)とするようである。

伊王島の見どころの一つが灯台(灯台公園・市指定名勝)と日本最古の無筋コンクリート造りの灯台旧吏員退息所(県指定有形文化財)である。

馬込教会堂

伊王島は、キリスト教の信仰が盛んで、馬込教会堂は、国の有形文化財に登録されている。また旧大明寺教会堂は、明治12年(1879)に建てられた初期の木造建築であるが、昭和50年(1975)愛知県犬山市の明治村に移築され、現在、一般公開されている。

伊王島に人々が住み始めたのはいつの頃かわからないが、伊王島は、奈良時代以降、彼杵郡に所属していたので、それなりの集落があったものと思われる。特に江戸時代、禁教令が発令されると、各地でキリシタンに対する弾圧は熾烈を極めた。

しかし、伊王島は、佐賀藩深堀領でキリシタンの探索が比較的緩やかであったため、西彼杵半島を中心に各地からキリシタンが移住するようになったという。

このことを物語るかのように、伊王島には、大明寺、一本松、船津、馬込、沖之島の五つ集落があったが、以前は、集落毎に言葉や風習が違っていたとのことである。

伊王島は、江戸時代以降、伊王島村と呼ばれ、石炭の島として知られた。特に昭和16年(1941)長崎鉱業(後の日鉄伊王島鉱業)が操業すると、人口は急増、伊王島町となった昭和37年(1962)には7416人になった。

しかし、昭和47年(1972)同鉱業が閉山すると、人口は急激に減少、令和3年(2021)現在、670人となっている。

平成17年(2005)には長崎市に編入され、同市伊王島町となったが、以後もリゾート施設や文化財などをめぐるコースなどが整備されている。

さらに平成23年(2011)には伊王島町と香焼町の間に伊王島大橋が架けられ、バスや乗用車でも手軽に行けるようになった。

秋の一日、伊王島の名所や旧跡を訪ねるとともに、素晴らしい自然や絶景を満喫してみてはいかがでしょう。

本稿は令和4年8月例会時発表(「伊王島を歩く」)の要旨である。

参考文献
『角川日本地名大辞典・42長崎県』角川書店 昭和62年
『日本歴史地名大系第43巻・長崎県の地名』平凡社 平成13年